

優秀賞

私の群青

茨城県 茨城県立結城第二高等学校三年 金澤 春菜

青春をしている。特に最近、何気ない日常の中、高校生だということを自覚して泣きそうになる。その度に青春を過剰摂取している、なんてことを思う。思い返せば、投げやりに生きすぎていた。私は中学時代、二年間学校へ行かず、部屋に閉じこもっていた。原因はいじめや周りの環境のせいではない。些細なことで挫折し、立ち上がれなくなった。誰のせいでもなく、自分が弱いせいだった。自分が、どうしようもなく惨めだった。

そんな私が今高校に通えているのは、色々な人の支えがあるからだ。高校に入学する前から、ずっと味方であってくれたのは両親だ。私には一つ年上で優秀な兄がいる。両親は、兄と私のことを一度だって比べたことはない。不登校になった時も、無理やり学校へ行かせようとはしなかった。そんな両親がいたからこそ、受験をしようという決心がいった。

受験の日、二年ぶりに着た制服は袖が短くて、中学一年生で止まっていた私が、急に三年生になったことが、なんだかおかしかった試験はさっぱりできなかった。そ

だと思う。今では大好きな先生であり、私が十七年生きてきた中で最も尊敬している人だ。その先生から俳句甲子園へと誘われた。まだこの時は大会に三年間関わることになるとは思わなかった。一年目、補欠として行った地方予選で私は衝撃を受けた。同い年の高校生がつくったとは思えない俳句の完成度、ディベートの熱量。自分が出場していないのに、興奮と緊張で頭が熱くなった。この場にいる人はみんな俳句が好きで、お互い高め合うために戦っている。誰も相手を否定する人はいない。その事実が、どうしようもなく私を駆り立てた。私にとって俳句甲子園はすっかり目標の一つになっていた。

二年目、選手として出場することになった私は、大会に向けて練習を重ねた。俳句甲子園を目標に据えたあの日から、たくさん俳句を勉強し、作品をつくった。俳句を詠むことも、鑑賞することも、自分の世界がどんどん広がっていくように楽しかった。先輩や先生と話して噛み合わない意見があっても、そこからお互いに鑑賞を深め合っていけることが嬉しくて、何回も話し合った。その結果、地方予選で勝利し、全国大会への切符を手にすることができた。迎えた全国大会では、レベルの高い俳句に圧倒され、到底今の自分では叶わないと思うような相手ばかりだった。けれど不思議と、また来たいと思っただ。気がつかなかったが、色々な人と話すうちに、随分と負けず嫌いになったらしい。

れでも、外の世界へ踏み出したその日は、息を思いっきり吸うことができた。高校に入学すると、さらに広い世界へと踏み出した。きっかけは一人で行った部活見学だった。よくわからないまま部屋へと招き入れられ、言われるがまま名前を書いて、気がつけば私は文芸部の一員となっていた。これが、私の人生の大きな転機となる。文芸部での活動で、私はたくさんの人と出会った。まず強烈だったのが先生だ。声が大きくて、それですっぴんが怖気付いてしまった。二年間家族以外と関わってこなかった私が関わるには、あまりにもパワフルすぎる人だった。けれど、入ったばかりの部活をやめる勇気もなくしばらく通っていると、あることに気がついた。怒られない。その先生は私のことを絶対に怒らなかつた。俳句や短歌を詠む上で、文法の間違いや技術的な面を指摘することはあるが、私の発想や考えを否定することは絶対にしなかつた。そのことがとても嬉しくて、先生と話すときは心が軽かった。少し頑固なところもあるが、だからこそ私も自分の考えを素直にぶつけることが出来たの



迎えた三年目。互いに切磋琢磨した先輩が卒業し、部員不足からのスタートだった。それでもなんとかメンバーを集め、地方予選への出場が決まった。頼りになる先輩を失い、自分が仲間を引っ張っていかねければならない状況で、私は無意識のうちに気を張り詰めていた。そんな時、「大丈夫」と支えてくれたのが文芸部の仲間達だった。気がつけば、ずっと一人だった私の周りには、たくさんの友達や先生がいて、私を支えてくれていた。それを自覚したとき、不思議と心が満たされて、「この人達と一緒に戦えるなら、どんな結果でもいいや」なんてことを思った。

そうして臨んだ地方大会は、あと一步のところでも惜しくも敗れてしまった。清々しい気分で終われたかと言えば嘘になる。今までの人生で経験したことがないくらい、悔しかった。でもその悔しさは、また次の私に繋がっていくと考えてみると、悪くはないな、と思った。

たくさんの人に出会い、たくさんの経験をしたが、私自身は中学時代のどうしようもない自分から、大して変わっていないように思える。けれど、私の好きな人達が好きだと言ってくれる、どうしようもない自分のことが、今はそんなに嫌いじゃない。